

## 論文の内容の要旨

論文題目     スタンダールの《民族学》 —— 《人間研究》から《文学的創造》へ——

氏名           南 玲子

スタンダール（本名アンリ・ベール）の作品には《国民性》への言及が非常に多い。スタンダールとヨーロッパの諸国、諸都市を表題に掲げた研究は雑誌論文からモノグラフィーまで枚挙に暇がなく、近年はアプローチも多様化している。だが《国民性》に関する発言の一定量が、彼が現地に足を運んで行った《観察》を自ら《分析》した成果である点に着目し、その活動が作家の活動とどのように結ばれているのかを解明する研究はなされてこなかった。本研究は《民族学》を切り口としてその欠落を埋め、スタンダールにとっての《人間研究》と《文学的創造》の意味を考究するという新しい試みである。

ルネサンス以来身体研究と精神研究に分裂していたフランスの《人類学》に統合の動きが生じ、全学問の争点として学者たちの注目を集めたのは18世紀末のことである。当時は国立学士院の最重要部門に集ったイデオログの影響下に、人間の心身の関係に基づく《人間研究》という新パラダイムが学問世界を席卷していた。この学問再編の時代に出現した人間観察者学会にも多彩な顔ぶれが揃い、イデオログとは対立しつつも彼らと同様に《事実》と《観察》を重視しながら《人類学》の構築を模索した。そうした《人間研究》が広く議論的となり進展をみた1800年前後は、フランス人類学のいわば黎明期に当たる。他方、ヨーロッパで《国民》の概念が強く意識されるようになったのは18世紀、特に大革命以降である。同世紀末にスイスで新語《民族学》が提案されるが、フランスでも世紀後半から、《習俗》や慣習に注目して地域性ないし《国民性》を《観察》、記述する動きが起きていた。1748年に出版された『法の精神』は、18世紀的な《国民性》研究の典型として、その後の《人間研究》に多大な影響を及ぼした作品である。二次資料の多用や政治的妥協等の難点はあるが、吟味された《事実》、有機的かつ知的な構成、対象地域の広さ、テーマの多様性、相対主義の精神を特徴とする同書は、民族学に向かつて開かれた総合的《国民性》研究と呼ぶことができる。そして著者モンテスキューが《国民性》を分析する際に《精神因》と並んで利用した《自然因》、特にその中核をなすクリマ理論の流行により、その後半世紀以上にわたって、《国民性》を研究する者は『法の精神』のクリマ理論に対する立

場の表明を迫られることになった。『法の精神』の《国民性》研究の方針を受け継いだ例としては、スタール夫人の『文学論』が挙げられる。モンテスキューやスタール夫人の実証性の尊重と体系の追求、そして何より《国民性》に関する総合的研究に対する意欲には、《人類学》と同じく黎明期にあった《民族学》の息吹が感じられる。

1783年にグルノーブルで生まれたアンリ・ベールは、祖父と中央学校の教育を受けて将来の《人間研究》の素地を作る。パリで現実の厳しさを知ると、彼は作家の名声、女性に対する成功、社会での出世という三種類の《幸福》を求め、大量の書物に向き合うなかで自分に必要な情報や方法を取捨選択するための腕を磨いていく。1803年には「フランス最高の詩人」になる準備として「人間を知ること」を自身の目標に掲げているが、アンリ・ベールが飽かず繰り返していた《情熱》と《性格》の研究と描写は、革命後の世界にふさわしい喜劇の登場人物を創造するため、そして同時代の観客を喜ばせるための作業だった。1804-1805年の冬に読んだトラシーの『イデオロギー提要』は、青年の思想の根底にあった経験主義的方法の有効性を再認識させ、科学への信頼、真理への愛、誤謬への警戒を特徴とする彼の《人間研究》に新たな道を拓く。さらにイデオロギーの「人間学」を「自己の学問」と読み替えることで、彼は学問的《人間研究》のなかに、自己探究と《幸福》追求の場所を確保することにも成功した。

上京して自国における首都と《地方》の対立に目を留めたアンリ・ベールは、《地方》と距離を置く一方、パリのサロンに集う上流階層を《観察》し、「最高度の文明」を誇るフランスの《国民性》は虚栄心だと断定する。なおドイツ長期滞在を経験する前に読書に頼って思い描かれたヨーロッパ諸国民の像は、概ね偏見の域を出ない。1803年以降は、《習俗》が彼の学問的考察の対象に昇格する。「汝自身を知れ」という銘の重視やイデオロギーの直接的、間接的影響から見て、アンリ・ベールも《人類学》、《民族学》の黎明期の脈動を遅まきながら共有したと考えられる。二十代の《人間研究》のテーマや関心との連続性が認められる1817年出版の『イタリア絵画史』で著者の相对主義的主張を支えるのは、《人類学》や《民族学》の学説である。この著者はクリマ理論と気質理論を結んでヨーロッパの諸国民像を提示するが、後年の『恋愛論』とは異なり、他人による《観察》と《分析》の結果を自己流の言説に応用したに過ぎなかった。

ところでアンリ・ベールは1800年に始まるイタリア滞在時から既に、通過する町の地勢や《習俗》の記録を残していたが、そこに学問的な方法論の影響は見られなかった。その後、故郷やマルセイユでも《観察》への意欲は空回りする。彼が旅行の技術に開眼したのは、民族学的現地調査の先駆者ヴォルネーの『シリア・エジプト旅行記』をドイツで読んだ1807年頃のことである。約二年を過ごしたブラウンシュヴァイクでは深刻な《人間嫌い》にも拘わらず意欲が持続し、こと恋愛に関する《習俗》に限れば、アンリ・ベールはドイツ人を十分に《観察》したといえる。1808年春に執筆された「ブラウンシュヴァイク旅行記」は、この町に関する総合的研究の試みである。自身の《観察》に基づいて執筆されている点が高い評価に値する反面、ドイツ語能力の未熟さ、主観の支配、《習俗》という概念の混乱、唐突な執筆中断という結末は惜まれる。

アンリ・ベールは1807年にスタール夫人の『コリヌス』を読み、イタリアへの思いを募らせた。1810年以降、彼は「イタリア的性格を研究するため」の旅行の準備に取りかかる。1811年

秋に敢行された旅の記録である「イタリア周遊記」によれば、《観察》への意欲は出発当初から高揚していたものの、再会したピエトラグルーア夫人への恋に翻弄された結果、彼は学問的な《観察》から遠のいたことを自覚する。しかし実際のところ、彼は愛人を情報提供者としてミラノ社交界における恋愛作法の《観察》を蓄積していた。1811年の経験や考察が多く利用された『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』には、語り手「ド・スタンダール氏」にヴォルネー的な現地調査者の姿を認めることができる。この作品は、ヨーロッパ諸国の《国民性》が織りなす座標系にイタリアを位置付けた、ヨーロッパ人による《民族学》的旅行記なのである。

1822年に出版された『恋愛論』は、主題に《国民性》を交差させる仕組みを『法の精神』、『文学論』と共有しており、議論における《精神因》の存在感や、《民族学》、《人類学》といった学問の言説で《国民性》研究を補強する試みであることから見ても、黎明期の《民族学》の延長線上にある。その一方、著者自身による《観察》の成果が議論の中核をなしている点で、『恋愛論』は先達の作品とは一線を画す。『恋愛論』第2編ではフランス、イタリア、イギリス、スペイン、ドイツから合衆国、中世プロヴァンスやアラビアまで、密度に差はあれ、大規模な比較恋愛論が展開される。諸国民の恋愛の特徴の比較対照をとおして「我々」の恋愛を見直すことに第2編の存在意義があるとスタンダールは述べているが、《他者》との関係において自己の本質を見つめるという方針は、《民族学》的研究の問題意識とも重なるものである。同時代の学問を意識し、《他者》に対する客観的な分析と自省を反復しながら執筆された『恋愛論』、なかでも同書第2編は、先駆的な《民族学》の書物と見做すことができる。

スタンダール自身の失恋経験が根底にあるとはいえ、その知的形成過程から考えて、『恋愛論』で繰り返し表明される学問的野心は軽視すべきものではない。『恋愛論』の著者が執着する「結晶作用」という新語は、学問書の成立に不可欠な用語であると同時に、思い出を《告白》に収束させないための仕掛けではないか。スタンダールは思索をとおして学問の視点から《事実》を描写する《哲学者》の才能と、表現によって読者を喜ばせる《詩人》の才能とが二種類の異なる能力であることを強く意識していた作家である。《詩人》には情熱的な人間という意味もある。《詩人》の感性を持つ彼が『恋愛論』に着手する際に敢えて学問書を選んだ理由は、失恋の治癒に《哲学者》の力を必要としたからだろう。『恋愛論』出版後に書かれた「ザルツブルクの小枝」と「エルネスティーヌ」は、「メティルドの小説」を頓挫させた「過度の透明性」を彼が克服し、《人間研究》の学問書を経て小説に向き合うようになる過程を示していて興味深い。二編の逸話には『恋愛論』の《民族学》も巧みに取り込まれる。『恋愛論』とその派生的逸話には、《哲学者》と《詩人》の相克を経て《文学的創造》に向かう作家の姿が映し出されているのである。

スタンダールは、小説家となってからも《哲学者》と《詩人》の葛藤から自由になることがない。彼は両者の役割を兼任しながら、知性と感性を総動員して小説世界を築く作家である。イタリア・ルネサンス期の写本に基づいて発表された『イタリア年代記』と呼ばれる中・短編の分析からも、そのことは裏付けられる。それではスタンダールの小説作品、とりわけ同じ写本から出発した『パルムの僧院』には、彼が《哲学者》として蓄積してきた人間に関する知識、特に《民族学》の成果がどのように反映されているか。それは今後取り組むべき大きな課題である。